

「大 腸」

〔編集責任者〕 内 海 胖 元関東通信病院部長
丹 羽 寛 文 東京大学第1内科

弘前大学教授・内科

松 永 藤 雄

消化管内視鏡診断学大系の第10巻「大腸」を贈られて、その書評を求められた。巻を手にしてまず本書の手頃の厚さ、大いさに親しみを覚え目次に眼を通すと、わが国の中堅の実力者が名を連らね、行き届いた企画と編集に好感をもつ。

パラパラと頁を繰るつもりが、丹羽博士担当の「歴史と現況」のところで、早くも手が止まる。私自身がこの道を志し、やがてそこに没入してからまもなく20年を迎えようとしている。この歴史の中の私自身の足跡も想起され、それぞれの時点での当時の研鑽の日々を懐しむ。

予定の仕事も忘れて読みふけるうちに、持前の注文癖も頭をもたげてくる。まず写真にうるさい私の目につくのはX線写真の刷り上がりで日本の印刷のインクのわるさは17,8年前に出した私の大腸のX線診断の著書の頃から余り改善されていない。人それぞれの好みもあるが、私はX線写真は日常見馴れたネガの像が

親しみやすい。最近ポジの写真の多いのは出版社の方針か、著者の好みか、いずれにしても写真がきたなく見えやすいのはポジのほうである。

次にカラーの内視鏡像である。この印刷の色の不揃いには、撮影時のフィルムの、あるいは現像時の原因となる写真の色の再現性に、術者には無関係のところに責任があるものに思われる。カラー印刷の色修正の困難さは、不均一の色の原因を同一頁内に収めなければならないことにも基因する。

しかしまた術者の責任も皆無ではないかもしれない。photographyである以上、スケッチを書き添えなくとも容易に理解できる「よい写真」を得ることが至上命令であるとする、ここでも普通のカメラマンの描写力、いわばスナップの精神が活きていなければならないように思う。

このような注文がならぶのは、満足した後の一言癖の発言である。日進月歩のこの分野の記録として、得

がたい資料を学界に提供した、と編集者・著者・関係者のご努力に敬意を表したい。

わが国経済のはげしい変動期に際会したこの著の出版のおくれが、up to date の top のものの印象をうすれさせたとすれば、それは不幸というより仕方がない。次の版においてさらに充実された姿となることを期待しよう。

最後に、責任編集者のひとり内海博士が、この好著の出版の日を待たずに他界されたことは真にいたましく、心から残念に思う。しかしこの好学の中堅学者の霊は、恐らく本書の完璧化の日まで見守っていてくれるにちがいない。

この分野の研究に従事するもののひとりとして、本書の出版をよろこび、江湖の好学の士に推せんのをおくる次第である。

B5・頁316・図270・写真182・原色図235 ㇔ 28,000 ㇔ 200
医学書院刊